

不思議なペット



序章

——ああ、あの口も違う……

この世界に来ることになった冒険者がはじめて訪れる町の近く、慣れ親しみやすく球体の愛らしいモンスターことプリリンがわんさかわんさかのごったがえしている。

冒険者の少女は、およそ人がプリリンに向けることがないだろう浮かぬ表情で必死に視線をおどらせていた。

何匹も倒したことがあるだけに、いまとなっては敵ではないプリリンの大群のなか普段武器に使っている石弓を持たずにあっちこちに首を向ける。まばたきの回数が減り、内心の不安とわびしさが瞳をうるませてきていた。

「……で、ミミ、こんなとこでなにしてんの？」

泣きそうな冒険者の少女——ミミ——に話しかけてきたのは、これまた冒険者で友人のメルカである。

「ねえ、時間があるなら狩りいこ～。ピラミッドいこ～？」

「う……うう……ふえええええええっ」

メルカに言われたピラミッドという単語で、とうとうミミは泣き出してしまった。

「ばかばか～ッ！　なんでいなくなっちゃったの～！！」

「え、あ、や、やっぱどうかしたの？　と、とりあえずベロスのレストランにでも行こ」

いたたまれなくなったメルカの提案も、それから十五分以上もの時間が経ってからようやく聞き入れられたミミであった。

「ペットのプリリンがどっかいっちゃって……」

ミミはラズベリージュースを飲み、おちついたところでうち明かした。

「……はああ??」

「だ、だからペットがいなくなっちゃったんだってば」

「どこで？」

「ピラミッドで……」

「あ～！ ひとりでいった!? 一緒に行こうって昨日やくそくしたのに！」

「ご、ごめんなさいですます。で、でも、ミミのほう弱いしひまだったから努力しよっかなーと」

「あ～、うん、まあそれはいいけどなんでまたペットが……ちゃんと世話してあげてた？」

「してたよ！ セロさんからいろいろ買ったりエサだって、たいがいいつも満腹にして……ないこともないと思うけど。でも、セロさんの話ではありえないって言ってたし」

まくしたてるように、かわいがっていたし逃げるなんてないってことを伝える。

セロのほかにもエアリスの町の人、王宮や空港のひとたちにも訊いてみたが口をそろえて「ありえない」と言われ、あげくミミが嘘をついているのではないかといった空気を出しはじめた人もいたというところまで話した。

「……う～ん」と、メルカは首をかしげて悩みこむ。

ミミとてわからないわけではなかった。

冒険をてつだってくれるペットがいなくなるというのは、世話さえしていれば絶対がない、というのが常識だからである。

ミミの嘘だ、と思われてもしかたないほどに。

きっとたびたび一緒にいるメルカも――

「ん～、漠然と探しても見つからないだろうし……」

「――え」

「??」

「信じて、くれるんだ？」

「え？ だっていなくなっちゃったわけだから、探さないと」

ミミの心境が伝わったのか、メルカは気恥ずかしそうにチーズケーキをほおぼる。

相談して、親身になってくれる冒険者との時間。

ミミはありがたさと、ペットを見失って心にあいていた虚をいやされた。

「あっ……メルカ、その……こんなときに言うのもなんだけど」

「ミミ？ なに、その、あ、あらたまって……」

「そのチーズケーキ、私のなんだけどお？」

「……Oh」

流れる空気が重くなった。

もっとも、ミミも、そしてメルカも感じているのはさきほどまでとは違う重さだ。

メルカのマスクには文句を言える程度の元気をとりもどしたミミに安堵したやわらかい笑みが浮かんでいる。

その気分の変化がよかったのかメルカが思いついたように言った。

「町の人にわからないなら同じ冒険者に訊け、よ！」

「あ、そっか」

「そっかって……まあ、ミミって友達すくないもんね」

「なにそのぐっさり」

「ミミもギルドに入ればよかったのに……」

「メルカみたいに強くないもん」

「だからなおさら入った方がいいよ？」

「うう……」

ミミは押し黙ってしまう。

いかんせんみんなでワイワイとするより、こうして特定の人と少人数で、というほうが性に合っている気がするし、迷惑しかかけないような気がして、ミミはどうしてもギルドへの加入は踏みとどまってしまう。

実際、パーティを組みたいときに使うアイテム——多くの冒険者に意思が伝わる不思議な腕輪も買った方がいいがなんとなく使えない。

メルカと奇跡的に仲良くなっているのは、彼女がおせっかいなのと狩りに行くときに薬を忘れていたりして意外とおっちょこちょいなところがある分、気が楽だったからだろうと思っている。

そもそもペットがいなくなったことを、同じ冒険者に相談するという発想すら出てこなかったのは、気が動転していただけではなく性格も影響しているのかもしれない。

「ま、加入のほうは無理強いはしないけど、ギルドの人に相談していいなら……ミミが会ったことある人がいいね」

「え、え？」

「アレならたぶんこのあたりで餃子つくったりチャーハンつくったり寿司にぎったりしてるからすぐつかまるだろーし」

「う、うん……」

生産中——そういう意思が他の冒険者に伝わる指輪はないはずなのに、そして……

「オーpens up the new ウォアアrld！！ by La-テエエイツル！ and a ガirl meets ぼおオイ！！」

いかつい演奏だが音色のいいギターをかきならし、それにまったく似つかわない熱さ、いや、暑苦しさを振りまいているのに作っているのは稲荷寿司というこのなんとも珍冒険者であり大半の人にとっては理解したくもない男が、メルカと同じギルドのヴァルカン氏である。

「あいかわらずすごいですね」

この手の不思議熱血男を相手にするのは苦手そうな、内向的といってもいいミミが話しかけた

。「ハッHAAHHA！ ミーに相談があると聞いたからな。スピーディにみんなのディナーを作り終えたところさ！」

ますますもって適当に言語を織り交ぜるといふどこかで見たような見たくもないようなスタイルのヴァルカン。

「ありがとうございます」

ただ、ミミは嫌いではなかった。

そもそもアルカディアの玄武というモンスターを倒すのに協力してくれたのが最初の出会いだったが、それから数時間かけてミミとメルカの装備強化につきあってくれたのだ。

いい人ではあるし、強いのだが……

「いいかげん自分が弾く曲ぐらいには合わせよーよ……」

メルカはげんなりと告げた。

手伝ってもらったときに、ながーく歌を聞かされ性格にも耐性がついたというのをメルカがミミに語ったのだが、さすがに会うたびに聞かされるというのには気がめいって来るとも話していた。

もっとも、ミミとしてはありがたい人が歌っているという感覚しかない。

一緒に歌おうとか、共感してほしいとか、だまって聞いてほしい、とかそういうことじゃなくて自分の魂を感じてほしいだけという利己的かつ傲慢なものなのだが、だからこそか取り合わないことを嘆いたりもしない。聞かなきゃ聞かないでかまわないオレは歌ってる、そんな『空気』だ。

ミミにとって、それはそんなに悪い印象ではなかった。

よく言えば自分と同じマイペースであり、そしてそんな彼が自分たちのために時間を割いてくれるというのはちょっとしたファンタジーだと思っているのだった。

適度なところまで気持ちが浮き上がる、そんな気分させてくれる芸術家……と思うのは評価が高すぎるのかもしれない。

なにはともあれメルカに話したときよりも落ち着いて、明確にミミは事情を説明した。

「ピラミッドで、ミイラプリリンを狩っていたんです。もちろんあのコにも手伝ってもらって…
…それで、依頼（クエスト）のアイテムがそろったのでエルパに帰ったんですけど……」

「そのときは一緒に帰ったの？」とメルカ。

「ううん……まだわたしが元気だったからすぐもどってもうちょっとがんばろうと思ったから…
…それで、急いで戻ろうとしたんですけど、その、まよってしまって、ですね」

ミミは恥ずかしげに言った。

「……その、だいぶ時間が経ってしまって、元の場所にもどったらいなかったんです」

それでも最初は探した。

しかしミミにとってピラミッドなかは複雑であり、それ以上深くもぐることなどできずパニックになってしまった。自分ひとりでは狩りたくない蛇女のモンスターとでくわしてしまったのもあり、正常な判断力はなかった。

結果、大事なペットが「いなくなった」ということしか頭になくなり、ピラミッドのなか、モ

ンスターのいない石塔のあたりでうとうとと眠ってしまって朝になってもペットは帰らず、ベロス周辺のモンスターのプリリンをながめていたわけである。

事情を話し終わったら、ミミはひとつのことが頭をよぎる。

「もしかしてミイラプリリンって同族……に見えたりしたのでしょうか？」

「それはないね。メルカの九尾（ペット）は、九尾を狩っているときもヘルプしてくれていたろ？ この世界のペットっていうのはそれはそれでひとつのシードみたいなものらしいからな」

「あ～、じゃあそのミイラの包帯に巻きついてた、とかは？ ペットは飼い主に似るっていうし」

「え～！ ひどいよメルカさん！」

「だってミミってばビートル帽子がうらやましいとかいってポイズンビートル乗せたりしてたじゃない？ 毒になりながら似合う似合うって遊んでたのはどこの誰さ??」

「うっ……」

つい先日、メルカと火打石を取りに行ったときの話だった。

いじわるさに憤りながらヴァルカンの反応をうかがうミミだったがジョークの一種として流したようだった。

「モンスターにまぎれたっていうのはどーかわからないが、モンスターをあまり近寄らせないリスの石塔の近くでもペットはステイできる。主人から離れてもすぐにバックすると思うが？」

そう……やはり答えは「ありえない」らしい。

「うむ、それじゃあとりあえずは聞き込みからがいいな！」

「ふえ？ ヴァルカンさん？」

「いまトークしたろう？ ピラミッド以外のところにいるのならどこかの町を通ってることもありうる。ピコーズ、ペットとモンスターの違いのひとつだからだ。ピラミッドのなかにいるのなら、ありえにくいがミイラプリリンにまぎれてしまったということもあるかもしれない」

「そ、そうですね」

不安が氷解するのと同時にどーにも気恥ずかしい。ミミはどこでもいいから採掘したいと思ったところでメルカが言う。

「そんじゃ、ピラミッドのなかはこっちが探すよ」

「え??」

「それがいいな」

「……どーして？」

ふたりがなぜか納得しているなかミミには腑が落ちない。

「主人の君がポータルを通過してるからだ。ペットがマスターを追って来ているかもしれない。町で聞き込みをするほうがいい。むしろピラミッドのなかに長いタイムいたのならそっちのほうが可能性としてはハイなのさ。ああ、オレも一緒にGOするさ」

——あ、ああああ。

採掘どころか自分の頭を発掘したい気分になってしまった。そして、ふたりが自分のペットを本気で探してくれるつもりなのがたまらなくこそばゆかった。

ミミが知らない時空間を飛ぶポータル——

まさに冒険者たちのポート（港）となっていてこの世界の主要な町同士をつないでもいる。そしてダンジョンのなかには、場所をつなぐだけのポータルではないものもあるらしい。ピラミッドのなかから行けるその場所に行けばなにかわかるかもしれない。

——ストーントン村。

この太古の世界、ヴァルカンはすでに来たことがあり、案内した先にはミミも見知った世界を旅する三人がいた。

ハインケル、ドルニエ、ヨンカスの三人だ。

「ハインケルに用か？ ヴァルカン」

「ヴァルカンさんか。料理の材料をとってきたの？」

「菓ですか～？ おいしいクッキーありますよ？」

口々にヴァルカンに話しかける三人。

「あ～、トウデイはそういう用事じゃないんだ。ehーこちらのガール、ミミのペットを探しに来たんだ～」

「あ、は、はい」

ほーっ？ と見つめてくるストーントン村の三人にミミはおもわず返事をしてしまった。なんの返事かを自分で自分にツッコミをいれているとヴァルカンが話しを進めた。

「ここをプリリンが通らなかったか？ ユーたちが見たならココにsheのキュートなペットがいるんだ」

——やっぱり知らないんだろーなあ……

いままでと同じくありえないことで、どちらかといえばミミを責めるようなことを言われて——

「ハインケルたち、不思議ないきものが森に入っていくのを見た」

「……」

「……」

ミミはもちろんヴァルカンでさえ止まってしまう。ハインケルのその衝撃的な答えにヨンカスが続けた。

「ぼくたちはペットにあんまりくわしくないんだけど、黄色い顔とシッポだけのコでしょ？ なんだかすごい勢いで跳ねていったよ」

「い、いつの話ですか？」

たまらずミミが口をはさむ。

今度はドルニエが答えた。

「昨日だったと思う」

「！！」

それを聞いて、ミミは弾けたように森に入ろうと走った。

が、すぐに障害物につっこんだ。

「きゃっ」

それがモンスターでもなければペットでもなく、まして岩や木でもない人の体だと気づくのに数秒かかる。一瞬で先回りをしたヴァルカンだった。

「ど、どーして邪魔をするんですか！？ ヴァルカンさん！」

ミミの脳裏に浮かんだことはペットのプリリンが恐竜に襲われているのではないかと考えたからだ。

通常、モンスターはペットに危害をくわえないが、町の人達が口をそろえて「ありえないこと」である自分のもとを離れたペットで、しかもここは特殊なポータルの先にある場所。常識が通用するかどうかうたがわしい。

「ヴァルカンさんが言ったんじゃないですか、ココは恐竜のモンスターがいっぱいいるってッ！」

おとなしいイメージをもたれやすいミミが激昂し、ヴァルカンの服につかみかかる。ヴァルカンはいつもうるさいぐらいなのに、沈黙を守っていた。

「ミミといったか？ ヴァルカンは邪魔をしているのではない。ハインケルにもわかる。我を忘れてモンスターの群れにとびこんでしまえばいくらヴァルカンでも君を守りきれないこともある」

「OH～、まあ、当たらずとも遠からずだ。パニックになっちゃ見つかるものも見つからない」

たしなめられたミミは、しかしペットに危険がおよんでいるかもと落ち着くか、やはりヴァルカンをふりきってでも行くべきかを迷った。

「はっきりいってユーの石弓は恐竜の一体一体なら倒せても群れる相手には不安だ」

真面目そうにトーンを下げたヴァルカンの言葉は辛辣だった。

「……っ……う、ウウッ」

群れる相手には不足する。

それは石弓という武器と特性でもある。

しかし武器の特性とはいえ、弱点は弱点に違いがない。

自分の力が否定されるというのは、ミミでもやはり悔しく憤る。

「だからミーと、落ち着いて探すべきだ。アーユーオーケイ？」

「っ……あっ」

いまさらながらにミミは邪魔をしているわけではないという言葉を理解できた。

そして肩を引き寄せられていたことに気づく。あふれていた涙がヴァルカンの服を濡らしていた。

「ご、ごご、ごめんなひゃいッ！！」

恥ずかしさと、それから胸のあたりにこみあげる妙な熱が自分でもわかるぐらいに顔を満たす。

真っ赤になったミミを、ヴァルカンと村の三人がくつつつと暖かく見守っていた。

ドルニエさんの料理をごちそうになったミミとヴァルカンは森のなかに入った。モンスターの急所に当たりやすくなる料理とのことだったがなんのことだろうと考えられる程度には落ち着いたミミは探索のあいだ自分でも驚くほどに強かった。

——そうか、一体、二体ずつぐらいにきちんと狙い当てれば私の攻撃でも倒せるんだ。

しっかりと落ち着いてモンスターの数を見て、誘導して、それから……

「ワイドショット！！」

出くわしたモンスターのほとんどをヴァルカンが倒したが、その隙にミミも数体を倒した。

「すばらぁしいい！！ エラガンツ！」

ヴァルカンに見守られながらの自分の成長はすこし気恥ずかしくもあったが、そうして自信をつけていくと景色がよく見える。

そしてついに——

「見つけた！！ ……ふえ？」

黄色くて丸い——丸い？ え？ なにこの濃い顔。

「……………」

「……ビクウ」

ヴァルカンが言ったように顔が大きかった。

見つけたのはいいがそれが本当に自分のペットなのかと目を疑った。

でかいだけならいいが、ものすごく、濃いのだ。

そのプリリンとは思えないプリリンっぽい大きい顔から、これまたプリリンらしからぬドスの利いた低音が響く。

「——おお、我があるじ」

——え、や、やっぱりペットの……？

「待っておったぞ……ミミ」

「……………」

「……………」

助けを求めるようにヴァルカンを見たが、彼もまた啞然としていた。

ダンディすぎるプリリンらしきペットが寄ってくる。

「再会でできてじつに喜ばしい……すこしばかり離れてしまったが、あるじの役に立てるように少々特訓というものをしてみたのだ。ああ、もちろんぼくはペットでしかないから直接モンスターを攻撃なんてできないのはわかってるし攻撃を受ける盾にもならぬことなどわかっているさ。だが、いやしかしだからこそ——ん？ どうしたあるじよ。ぼくがどうかしたのか」

「……す、すごく、大きいです」

一人称が、ぼく、というのがなんとか言葉を発することができた理由だろう。意外すぎた。それほどに目の前の黄色はダンディすぎた。

「ふむ、そのだな、特訓しようと思ったのはいいが腹が減ってしまった。空腹に耐えかねてこんなところにまで迷ってしまって途方にくれていたわけだ」

飼い主に似るとはよくいうが、ダンディな黄色い顔が朱に染まるのを見ていると自分のペットだとは思いたくない。

しかし、まぎれもなくミミのペットのプリリンだった。

飼い主とペットには固有の絆がある。貸し借りなどができない唯一無二の存在だ。この世界の常識、ルールがすこしうらめしい。

「ま、まあ見つかってよかったでございましょうお嬢様」

動揺したのだろうか？ ヴァルカンの人格すら変わってしまった。

ミミは徐々に状況に慣れ、お嬢様などと呼ばれたのをちょっと恥ずかしく思う。

「えっと、とりあえずドルニエさんたちのところまで行きましょう。あ、プリリン、私もちょっとは強くなったんだよ」

「おお！ 左様か！ さすがぼくのあるじ！」

ともに同じ時間に成長したという過程があるためか、ミミとそのペットは和気あいあいとする。

一方、ヴァルカンのほうはといえば、ミミの成長は微笑ましいものの異常といってもいいペットの変わり様になにか不穏なものがないかと過去自分がこのあたりを狩場に使っていたときの記憶をあさっていた。

シギシギッと恐竜型のモンスターの鳴き声や、太古の世界ならではの植物や鳥などのざわめきが聞こえるなか、ヴァルカンとダンディなプリリンに見守られながらミミはストーン村へと進む。

ミミの成長のため基本的にヴァルカンは手を出さないのは行きと同じなのだがペットたるプリリンは必死に戦利品を回収していた。

「ありがと〜」

「ははっはっ、よいアイテムを収集できたな！」

「あ、これ、わ〜〜〜ッ、たしかこのウガウガの石斧ってレアだよねレア、やった〜〜〜！」

薬やファッションショップのせいで金欠になりやすいミミにヴァルカンが前に話してくれた高額取引アイテムだ。

ミミの手にはすこし重く感じたので、とりあえず荷物にいれておく。そしてまたミミが恐竜を狩る。

これならメルカの足をひっぱることなくこのあたりも、もっと上の狩場でもだいじょうぶかもしれない、と未来への希望にウキウキと石弓を放つ。

ペットとの仲も深まったような気がして、じつにいい感じだ。

余裕が出てくると、ミミはつきあってくれたヴァルカンが気になってきた。

異常ともいえるペットの消失につきあってくれたのだ。

大したお礼はできないものの、いまの自分なら、さっき拾ったばかりのレアアイテムをあげちゃうこともやぶさかではない。

「あの、ヴァルカンさん？」

「ん？ あ、ああ……」

「……どーしたんです？ なにか気になることとか」

考え事をしていたようだったので、自分にはなにもできないとわかっていてもつつい訊いてしまう。

それだけここ数時間の成長とペットとの再会は気分をもりあげ、いまならどこにでも行けそうな、あの冒険が始まったときのようなワクワクがあった。

「いやいや、その……ユーは平気なのか？」

ヴァルカンの視線を追うと、おとなしく——していても目立つが——プリリンが草を踏みつけている。

「平気って？」

「なにか、こう、イヤな感じとかそういうのはないのか？」

「え、だって、あのコはあのコですよ。ものすんごく低いダンディボイスで会話すること以外はそんなに変わらないかなと」

「ん～、まあ、ユーがよしとするなら、悪くはないか……」

そうは言うものの、どこか浮かないヴァルカン。

「……ん？ ところで道をまちがえていないか？」

「……え？」

また迷った？

「すまぬ、方向音痴なのだ」

いやそれは知っている。ミミ自身が迷うし。

「まちがえたらてっきりヴァルカン殿が修正していただけたらと思っていたのだが」

「あ～ソーリー、考え事をしていて……って、あ～、このへんはやばいかも、ミミロンリーじゃキツそうなのが……」

——ドォォオンッ

「——え」

目の前に現れたのは巨大な足だった。

「プロトドン、おそらくこの世界最大クラスのビックモンスターだ」

しれっと答えたヴァルカンは悪いと思ったのか前にでる。

ヴァルカンなら苦もなく倒せるしミミの壁にもなれるだろう。

「あい待った〜！」

プリリンの声が低く響く。

「ヴァルカン殿、すまぬがここはあるじの成長を見守ってもらえぬか」

「いや、ああ、まあ、いいが」

「え〜〜〜ッ」

勝手に話を進めないでほしい、とは言うもののたしかに手伝ってもらってばかりでは成長はない。

ただ――

「おっきすぎるよ〜、あんなのどーやってやっつけるの!？」

近くだと足しか見えないようなモンスターである。

踏みつけられたらたまらない。

「だいじょうぶだ、プログレムない。弱点もあの足だから」

「がんばれあるじ! 避けて避けて当てるのだ」

「う、うう……わかった」

石弓をかまえるミミ。

ヴァルカンは下がり、いつでも回復できるように後ろについた。

プリリンは――

「あるじ、走って前進！」

「あ、はい！」

言われた通りにミミが走ると直前までいた場所に巨大な足が落ちてくる。

そう、足が落ちてくるといったほうが近い。

地面が揺れ、耳が割れそうな衝撃音の下腹まで響く。

ミミがっているモンスターのなかでこれまで最大級だった玄武よりも、はるかにでかいのだ

。

「ひっッ」

ミミの足がすくむ。

プロトドンの足の影が暗く落ちた。

「やばい、ノンストップ!! 動け！」

ついぞギターを構えるヴァルカン。

その横を一陣の風が走った。

「ミミ、組むよ！」

「え、メルカ!？」

とっさにメルカがミミごと吹き飛ばす。

「風迅脚ッ！！」

すぐさまプロトドンに向かって技を放つメルカ。

が、さすがに大きすぎるのか、利いた感触はあっても倒せる気がしない。

「おお～メルカ殿！」

「え、あ、だ、だれよこの濃い一頭身」

「話は後にしよう、メルカ殿、すまぬが足を引きつけてくれ。あるじ！ ぼくの合図で技を撃て！」

ペットからの指示にしたがい、女性陣ふたりが顔を見合わせる。

「おもいきりやってみるんだ、ケガしたらミーが治す！」

「……なんだか知らないけど、いくよミミ！」

「うん！」

影が落ちた場所に足がくる。

メルカは影の近くにわざと走りこみ、グッと身構えた。

「メルカ殿、いまだ！」

「——半月脚！」

プリリンの言葉に合わせてようにプロトドンの足が落ちてきてメルカの技が一矢報いる。

「あるじッ！」

石弓のトリガーをしぼる。

迷いのないミミの技が炸裂。

「ワイドショット！！」

さらに——

「天龍脚だあッ！」

メルカが空中でくるくると複雑に動きプロトドンにダメージを与えた。

メルカが地上に降りる前にミミが近づく。

「——リミッター解除ッ！」

石弓が壊れかねないほどの爆薬のスキル。

ミミ自身、使ったことのないこの技の初手は殴打。

そして殴打した同じところに別次元から取り出されたバズーカがうなる。

たまらず足を引きかけたプロトドンに、しかけられた爆薬が炸裂した。

全弾命中——ミミ、メルカのパーティはプロトドンを倒した。

——ストーントン村。

「ブラボーブラボーッ！」

ヴァルカンは捨て身のような攻撃をくりだしたメルカの治療を終わらせて言った。

「へえ、この子たちふたりでプロトドンをねえ」とドルニエ。

「ハインケル、おまえたちを見直した！」

「すごいね！」

ハインケルとヨンカスも同じく祝う。

「え、えへへっ……腰抜けちゃったけどね、メルカが来てくれなかったらあぶなかったよお」

「ははっ、まあ、でも強力な技も覚えてて、ミミもすごいよ」

「うふふっ、すこし成長したんだよ」

「みただね、これからもがんばろー！」

「お〜！」

ミミとメルカは手や腕をたがいに合わせ、きゃっきゃと喜びにひたる。

他方——ヴァルカンはといえば。

「ブラボー！ すばらしい、あんなタイミングばっちりです指示されるとは、コマンダー、コマンダーペット！ あにき、あにきと呼ばせてくれえええ！」

「よ、よせやい、照れる」

じつに不思議な光景である。

「……あれ、ほんとにプリリン？」

「うん……そうだけど」

「あれ、ほんとにヴァルカンさん？」

「……たぶん」

「ところでヴァルカン殿」

「？」

でかい顔にも慣れ、近づいたヴァルカンにプリリンがささやく。

「あるじを勧誘せぬのか？」

「あ、ああ、ギルドに入るか入らないかはフリーだし、本人が望まないといかんと……」

「いやいや、パートナーに勧誘せぬのかと訊いているんだが……」

「——っ、ごふ、こふこふッ」

エピローグ

——後日。

「ほら、ミミ、そんなに緊張しなくてもいいから」

「で、でもお」

「ヴァルカンさんだって待ってるわけだし、ね」

「うう～っ、い、一緒にいこうよ、プリリンも」

「いや、ぼくは邪魔になりかねないから……」

「ほらほら、はやくはやく！」

「も～、わかったよ……」

「きょ、今日からこのギルドにお世話になります。ミミです」